

177 壁紙のジャポニスム (2023年7月18日)

フランス東部アルザス地方のドイツとスイスの国境近くにあるリックスハイムには、壁紙博物館があります。リックスハイムでは18世紀から壁紙の生産が始まり、19世紀には産業が大きく発展しました。現在でもリックスハイムに本拠地を置くズベール社が、生産を続けています。

壁紙博物館は、壁紙の歴史を知ることができる作品や資料を保管し、それらを展示する珍しい博物館です。この博物館のコレクションには、19世紀に作られたジャポニスムの影響を受けた壁紙もあります。これまでに、[浮世絵の影響を受けた絵画](#)、北斎漫画のモチーフを使った[エミール・ガレの花瓶](#)や[セルビス・ルソ一の皿](#)をご紹介しました。19世紀には、絵画や陶磁器といった装飾品のみならず、壁紙というインテリアにもジャポニスムが流行していたことから、当時のフランスにおいて日本美術が大きな関心を持って取り入れられていたことがわかります。

浮世絵の影響の一つには、植物をモチーフとして多く用いたことが挙げられます。その一例として、菊の花をモチーフとした壁紙があります(写真右)。菊は、皇室の御紋にもなっている日本を代表する花の一つです。華やかな菊の花が描かれている壁紙で、19世紀のフランスの邸宅の雰囲気にも合いそうです。一目見ただけでは、日本美術の影響をそれほど意識しませんが、壁紙の脇にはCHRYSANTHEME MIKADO(菊 帝)と印刷されています。MIKADOとは、天皇を意味します。この壁紙をデザインした人は、菊の花が皇室の御紋であることを知っていたのではないかと推測されます。



と推測されます。

金色を使った豪華な壁紙もあります(写真左)。私は、これらの壁紙を見て、織物である着物の帯を思い出しました。近くで見ると、縦又は横に細い線が入っているよう印刷されており、それらの線があることで織物のように見えます。当

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

時の壁紙の図案家が、日本の帯を見たかは分かりませんが、日本の美術品の影響を受けていることは想像されます。

直接的に日本の浮世絵や工芸品の影響を受けていると考えられる壁紙もあります。写真右の壁紙（拡大図）は、梅の花のような形や掛軸をイメージさせる縦長の枠の中に、着物姿の人物や風景が描かれています。背景には花が描かれ、グレーブルーの地に金色の雷紋と呼ばれる模様（直線を直角に何度も折り曲げたモチーフ）が地紋になっています。



一番驚いたのは、葛飾北斎の浮世絵シリーズである「富嶽三十六景」の有名な二つの場面（左下の「凱風快晴」と右下の「尾州不二見原」と歌川広重の「近江八景」の一場面（上部の「瀬田夕照」）を一つのデザインにした壁紙です（写真右）。三つのモチーフの境目に描かれた梅か桃のような花が、三つの場面を一つにまとめています。三つの独立した絵を合わせたデザインを初めて見たことと、それらを一つにまとめて新たなデザインを生み出してしまう当時の図案家の構成力と、二重の意味で驚きを覚えました。北斎や広重がこの壁紙を見たら、おそらく彼らも目を丸くしたことでしょう。



※美術館の展示は、変更されることがあります。